凶器注目効果における検索方法の違いと情動変化の影響の検討

沖田薫子¹・竹原卓真¹

(¹同志社大学大学院心理学研究科)

キーワード：凶器注目効果，情動覚醒説，描画方法

Investigation of differences in retrieval methods and affects of emotional changes in weapon focus effect

Kaoruko OKITA¹, Takuma TAKEHARA¹

(¹Graduate School of Psychology, Doshisha Univ.)

Key Words: Weapon focus effect, Emotional arousal theory, Drawing method

目 的

殺人や強盗事件などに遭遇した時に目撃者の注意が犯人の凶器に釘付けになり，犯人の人相や着衣，周囲の状況などに関する記憶が抑制される凶器注目効果(Maass & Köhnken, 1989)という現象がある。いくつか提案されているモデルの中から，本研究では情動覚醒説に立脚し，凶器写真を見る前後で緊張・興奮や不安感といった情動状態が高まることによって凶器注目効果が生じるかを検証した。さらに記憶の検索段階にも着目し，出来事の想起時にイメージを直接反映させることができる描画方法が，凶器注目効果が生じる場面で記憶検索を行う上で有効であると考え，その効果も検討した。

方 法

実験参加者 同志社大学の学生 32 人で，平均年齢は 20.75 ± 0.98 歳であった。

刺激材料 刺激となる写真は実験者の親族宅のキッチンで撮影した。また，刺激写真は条件ごとに 1 枚とした。写真は男性が女性に凶器を向けているパターンとマヨネーズを向けているパターンの 2 種類であった。

情動評価 情動評価には坂野ら(1994)の気分調査票を使用した。なお，この情動評価は情動状態の調査と妨害課題の役割の双方を兼ねた。また，分析に用いる尺度は緊張・興奮および不安感を用いた。

実験計画 独立変数は，写真の種類（凶器／マヨネーズ）で，参加者内要因であった。また，もう 1 つの独立変数は検索方法で，刺激写真の内容を思い出す際に文章を書かせる統制群と絵を描かせる描画群に分けてそれらに実験参加者をランダムに振り分ける参加者間要因とした。

装置 写真呈示には 2m × 1.5m のスクリーンとデジタルプロジェクターを，時間の計測にはストップウォッチを使用した。実験制御には 31cm × 17.2cm の液晶モニタ，および Windows7 のノートパソコンと PowerPoint を用いた。

手続き 個別実験で偶発学習課題とした。刺激写真の呈示前に坂野ら(1994)による気分調査票に回答させた。その後，スクリーンに刺激となるどちらかの条件における写真を 20 秒間呈示した。その後，妨害課題の役割を兼ねて気分調査票に再度回答させた。そして，白紙と鉛筆を渡して 3 分間の時間を与え，統制群には見た写真について覚えていることを文章で書くように，描画群には見た写真について覚えていることを絵で描くように教示した。続いて，刺激の内容について「男性の服は何色でしたか？」などと問う 17 項目の再生テストを行った。

結 果

再生テストの正解数は，分散分析の結果，写真の種類の主効果が有意となり，凶器の写真よりもマヨネーズの写真の方が高かった($F(1, 30) = 9.20, p < .05$)。検索方法の主効果およ

び交互作用は有意ではなかった（図 1 参照）。

次に，情動評価に関しては，マヨネーズ写真において呈示前の方が呈示後よりも不安感得点が高かった($F(1, 31) = 5.90, p < .05$)。また，呈示後において凶器写真の方がマヨネーズ写真よりも緊張・興奮得点が高く($F(1, 31) = 4.31, p < .05$)，不安感得点も高かった($F(1, 31) = 6.15, p < .05$)。

図 1 各条件における再生テストの平均値と標準誤差

考 察

本実験において凶器の写真よりもマヨネーズの写真の方が再生テストの正解数が多かったため，凶器注目効果が生じたと考えられる。しかし，有効性が示唆されている描画方法を用いた記憶検索が，凶器注目効果が生じるような場面に対しても有効な手段になり得るという仮説は支持されなかった。また，凶器写真の呈示前後では情動の大きな変化が無かったため，情動覚醒説も完全には支持されなかった。一方，凶器を見た場合は見ない場合よりも緊張や興奮，不安感の情動状態が高まったことから一部情動覚醒説が支持されたと考えられる。本実験では情動覚醒説を完全に支持できる結果ではなかったため，今後は凶器注目効果のさらに異なる生起要因を考慮すべきである。また，先行研究によると描画方法を用いる際に状況に関する質問をしながら描画を行うことが有効であると述べられていたことから，今後はその効果も考慮すべきであろう。

引用文献

- Maass, A., & Köhnken, G. (1989). Eyewitness identification: Simulating the "weapon focus". *Law and Human Behavior*, 13, 397-408.
- 坂野雄二・福井知美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義・野村忍・末松弘行. (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討. *心身医学*, 34, 629-636.